

アリストテレスにおける知識の統一性の問題

杉本 英太

序論

アリストテレスは様々な著作のなかで、一つの知識がどの範囲の事柄を対象とするかという問題にしばしば論及する。これを端的に主題とするのは『分析論後書』1巻28章だが、そのほか第一哲学や倫理学・政治学の具体的な探究プログラムを提示する箇所でも同様の関心が示される¹。その際アリストテレスは、一つの知識が対象とする事柄を、一つの「類」と呼ぶ。彼によれば、「全ての技術や知識において、それが部分的に成り立ちかけているのではなく、或る一つの類をめぐって完成している場合、各々の類に適合するものごとを考察することは、一つの知識に属する」（*Pol.* 4.1, 1288b10-12）。ここからは、一つの類を対象とすることが、一つの知識が成立するための基本条件だという考えが読み取れる。その意味で、類は知識の構成要素である。知識と類の関係、および類とその他の知識の構成要素との関係は、『分析論後書』の各所で理論化されている。

もともと、知識の成立条件としての類に関するアリストテレスの見解の整合性は、しばしば疑問視されてきた。とりわけ疑われてきたのは、『形而上学』などの具体的な探究における知識成立の捉え方が、『分析論後書』の知識論の枠組みと乖離していないかということである。この乖離の有無や程度の見積もりは、「プラトンの統一知の構想に対抗して、アリストテレスは知識の専門分化を理論的に裏付けた」という通説的対比の妥当性にかかわる大きな問題である²。

ところで、知識の理論と実践の乖離にかかわるこの問題設定は、『分析論後書』の理論における知識の構造と類の役割についての一定の了解を前提している。しかしながら実際は、これらの基本的な点についても、解釈者の見解は必ずしも一致を見ていない。このことは、そもそも一つの知識が一つの類を扱うという主張の意味内容について、私たちが明確な共通理解に達していないことを意

1 *Met.* B2, Γ2; *EN* 1.4; *Pol.* 4.1. この主題は「反対者を同一の知識が扱う」という（本論文が扱わない）テーゼへの言及箇所と併せて Bonitz 1870, 278b10-22 で独立に立項されている。

2 問題の古典的な定式化として Owen 1960 を参照。特に『形而上学』の普遍知にかかわる問題についての現在の議論状況は、杉本 2024 およびその参考文献を参照。

味する。

この基本的な点の解明が、本論文のねらいである。すなわち、以下で私は、『分析論後書』における「類」概念を明確化し、知識の統一においてそれが果たす役割を明らかにする。知識の類概念についての支配的解釈は、それを種類構造の頂点をなす「最大類」とみなすものだが、近年これに反対して、類を端的に知識に対応する論証の主項と同一視する解釈も登場している（なお論述を簡略にするため、以下「～項」という表現によって、言語表現が指示する事柄を意味しうることとする³）。本論文の提示する解釈は、そのどちらとも異なる。本論文の主張によれば、知識の類とは、当の知識に属する諸論証の諸主項をメンバーとする集合である。他方、それらの主項は、各々の定義上の基本構成要素（原始項）を共有しており、類の（したがって知識の）統一性は、その類のメンバーによる原始項の共有に根拠をもつ。以下で論じるように、この解釈は従来の諸解釈のメリットを取り入れた上で、よりテキストに整合的であり、かつ類の画定可能性に関して従来の解釈が抱える問題を解消できる。

本論文の第1節では、類概念に関する従来の解釈を整理する。特に上記の「最大類解釈」、および類を端的に論証の主項と同一視する「本質解釈」の二つを主要候補として取り上げ、両者の問題点を指摘する。続く第2節では、『分析論後書』1巻28章の読解を通じて、本論文が「原始項解釈」と呼ぶ解釈を擁護する（本論文は『分析論後書』1巻を主な分析対象とするため、以下、同巻中の箇所は「28章」のように章数のみで参照する）。第3節では、類の統一性と論証の自体的述定の理論の関係を示し、本論文の原始項解釈が本質解釈の動機を汲みうることを論じる。結論では、知識理論とその応用の乖離という冒頭で触れた問題に関して、本論文の解釈が与える示唆に触れる。

1. 知識の類に関する従来の諸解釈

本論文の解釈を提示する前に、類概念に関する二つの解釈、すなわち支配的な「最高類解釈」とSteinkrügerの「本質解釈」を検討する⁴。紙幅の都合上、

3 例えば「ソクラテスは歩く」の「主項」をソクラテスその人、「主項の本質」を（例えば）人間とするような言葉づかいを許す。実際、例えば論証の前提の主項と述項の間に成立する後述の「自体的」関係は、語の間ではなく、存在者の間の関係である。Cf. Zuppolini 2018.

4 Steinkrüger 2018.

ここでは有力かつ本論文の解釈と直接対抗するこれら二つのアプローチに焦点を合わせ、その他の既存の解釈の包括的検討は目指さない⁵。

最高類解釈は、知識の類を、知識の諸対象を類種構造によって分類した際の最も上位の類と同定する解釈である⁶。例えば幾何学の場合には、〈二等辺三角形－三角形－多角形－大きさ〉などの類種構造が考えられる。ここでは「大きさ(μέγεθος)」がさらに上位の類をもたない最高類である(cf. 7, 75b5)。ゆえにこれが幾何学の類であり、全ての幾何学的対象はこの類に属する。

Hintikka が提案するヴァージョンの最高類解釈によれば、最高類の措定の眼目は、「全ての A は B である」という論証の前提に含まれる存在含意——すなわちこの前提が「A が存在する」を含意すること——の正当化にある⁷。Hintikka は 10 章の記述を引証する。10 章の冒頭では、知識の類に含まれる諸項が、(α) その「何を意味表示するか(τί σημαίνει)」と「あること(ὄτι ἔστι)」の両方が論証に先立って受け入れられる第一のものども(τὰ πρῶτα)と(β) 前者が受け入れられ後者が論証される派生的なものども(τὰ ἐκ τούτων)の 2 タイプに分類される(10, 76a31-34)。その後、この分類を踏まえたうえで、類は「およそあることが措定されることども」(76b12)とされ、類の属性すなわち「その各々が何を意味表示するかをひとが受け入れることども」(76b15-16)と対比される。つまり、類自体がタイプ α に属し、類の属性はタイプ β に属する。Hintikka の解釈に従えば、類の措定という操作の眼目は、最高類 G の存在を最初に前提することで、「F は G である」「E は F である」……といった項連鎖を通じて、類に含まれる全ての項の存在を保証することである。例えば幾何学の場合、大きさの存在を最初に前提することで、「多角形は大きさである」「三角形は多角形である」といった論証の諸前提を通じて、多角形や三角形の存在が自動的に保証される。これは、例えば「三角形は二直角に等しい内角の和をもつ」といった定理における「三角形」が空名辞でないと保証されることを意味する。

5 Steinkrüger が整理するように、最高類解釈に対する彼以前の代案としては、類を主項・原理・結論等の自体的関係が結ぶ「ネットワーク」と解する McKirahan 1992 の解釈、および、知識の領域はそれを探究するアスペクトにより決定されるという解釈の二つがある。本論文は、最高類解釈が課す制約を緩める点で前者と軌を一にするが、より強い主張を行う(注 15 をも参照)。他方で、アスペクトによる知識の特徴づけは本論文の解釈と矛盾しない。とはいえ後述の通り、アリストテレスが明示する知識の同一性基準はアスペクトに訴えるものではない。

6 Hintikka 1972; Barnes 1993; Detel 1993.

7 Hintikka 1972, 62ff.

この解釈は内容上の単純さを利点とするが、必ずしも実際の論述に即していない。まず、最高類を述項とする項連鎖による諸対象の存在の保証という操作は、テキストから直接には読み取れない。むしろ7章の「基礎に置かれる類」(75a42-75b1) という表現は、類が論証の主項に位置することを示唆する。

より重大な問題として、この解釈は、アリストテレスがタイプ α に分類する項の多様性を説明できない。「ある」ことを受け入れるべき事柄として彼が実際に挙げる例には、「単位」「点」「線」が含まれる。最高類解釈を採る論者はしばしばこれらの措定をも「類」の措定の一種（ないしは一部）として認める方針を採るが、それが整合的な読みを導くかは疑わしい⁸。元来この分類が「各々の類のうちに」(76a31) ある項について導入されていることにも注意が必要である。

そもそも、知識の類が類種構造をもつという想定自体、自明に正しいとは言えない。確かにアリストテレスの術語法において、類は「諸種差の基礎に置かれるもの」(*Met.* Δ 28, 1024b3-4)を意味する。だが、種差による分割可能性の要件は、『分析論後書』1巻のうち知識の類を主題的に取り上げる7章、10章、28章において言及されていない。ゆえに知識の「類」が、種差の相関概念としての「類」とは異なる眼目をもつという想定は可能である。

加えてSteinkrügerが指摘するように、最高類解釈は、なぜ特に「大きさ」を最高類として措定すべきなのか、例えばさらに上位の「量」や、下位の「多角形」ではいけないのか、という内容上の疑問を生む⁹。かりに類の範囲が純粋な約定にすぎないとすると、何が一つの知識であるか自体が純粋な約定になってしまう。

他方、Steinkrüger自身の本質解釈は、最高類解釈とは根本的に異なる解釈である。Steinkrügerは論証における類の移行($\mu\epsilon\tau\acute{\alpha}\beta\alpha\sigma\iota\varsigma$)禁止の原則に焦点を合わせたうえで、禁止の対象は従来解されてきたような学問分野間の移行ではないと論じる。むしろSteinkrügerによれば、移行が禁じられる「類」とは個々の論証の主項のことであり、移行が禁じられる理由は、論証の結論は究極的には論証の主項の本質的諸属性にのみ依存して成り立つという想定に存する¹⁰。このように解する場合、一個の知識は、最高類解釈の場合と比べてはるかに狭いものになる。例えば、幾何学ではなく三角形の知識が、一個の知識である。

8 Hintikka 1972, 68. 高橋 2014 *ad loc.* や酒井 2020, 68 もこの例であるように思われる。最高類解釈に対する同様の批判として Frede 1974, 82; McKirahan 1992, 62 も参照。

9 Steinkrüger 2018, 114-115.

10 Steinkrüger 2018, 129ff.

Steinkrüger は自らの本質解釈の利点として、類の移行の禁止が論証の主項の諸属性と論証の結論との依存関係に由来すると理解すれば、当の禁止が 4-6 章の自体的帰属の理論の帰結であること (cf. “ἀπα” 7, 75a38) が容易に理解できるということを挙げる。自体的帰属の理論に関する自らの説明と骨子が合致すると Steinkrüger がみなす Bronstein の議論をもとに、この点を敷衍しておく (Steinkrüger 自身の説明方式はやや天下り的だからである)¹¹。Bronstein は論証のタイプを「モデル 1」と「モデル 2」の二つに分類する。モデル 1 は、中項が主項の本質を含むタイプの論証であり、「惑星に瞬かないことが属する」という結論を「近さ」という中項を通じて導く例がこれに当たる (13, 78a30)。モデル 2 は反対に中項が述項の本質を含むタイプの論証であり、「広葉樹は落葉する」という結論を「樹液が凝結する」という中項を通じて導く例がこれに当たる (2.17, 99a29)。モデル 2 の場合、一見して主項の本質は論証において役割を果たさないように見える。だがおそらく、「広葉樹は樹液が凝結する」という前提は無中項ではなく、さらなる論証を要する。そしてその論証は、広葉樹の本質 (の一部) を中項とするはずである。このようにして、「全てのモデル 2 論証はモデル 1 論証に説明上の根拠をもつ」(Bronstein 2016, 49)。これは、全ての論証が究極的には主項の本質を成立根拠とすることを意味する。Steinkrüger によれば、これこそが主項の本質から独立の事柄を論証に用いるべきでない理由 (=類の移行禁止の理由) である。4-6 章における自体的帰属の理論の眼目はまさに論証における命題の成立を主項ないし述項の本質に根拠づけることにあるのだから、この解釈は 4-6 章と 7 章の論理的関係を明確に説明できる。

加えて Steinkrüger は、いわゆる下屬という類移行禁止の例外も本質解釈で容易に説明できると論じる¹²。アリストテレスは、特定の光学的事象が何ゆえ成立するかを光学そのものではなく幾何学が説明するような場合に、両者の間に「一方が他方の下にある (θάτερον ὑπὸ θάτερον)」(13, 78b36-37) という関係が成り立つと述べている。最高類解釈を採る場合、こうした下屬関係は光学的対象一般と幾何学的対象一般の間に成り立つことになり、そうした例外的事象が可能である理由の説明が別途必要になる。他方で本質解釈によれば、それが可能なのは、幾何学的説明が光の本質的属性 (例えば直線であるという幾何学的性質) にのみ依拠するからである。つまり、類の移行は実はそもそも起きていないとい

11 Bronstein 2016, ch.1; cf. Steinkrüger 2018, 129n49.

12 Steinkrüger 2018, 144ff.

う形で、いわば単一の原理から見かけ上の例外事例を処理できる。

Steinkrüger の解釈は洗練されているが、やはりいくつかの箇所と平仄が合わない。まず、類を指す「およそあることが措定されることども (ὅσα ... εἶναι τίθεται)」という先述の複数形表現を、本質解釈のもとで説明するのは難しい。さらに次節で見る 28 章の冒頭でも「一つの類」と同格的に複数形の ὅσα 節が置かれ、「それらの自体的属性」(πάθη τούτων καθ' αὐτά) が語られている。そして ὅσα 節の内容からしても、類の内部には一定の異種性が想定されているように思われる。そうした複数性や異種性を、本質解釈は説明しにくい。

また下屬関係に関しても、Steinkrüger の解釈は、アリストテレスが行う二種類の事例の区別を無視してしまっている。アリストテレスは光学と幾何学のようなタイプの関係とは別に、「互いの下にあるのではない諸知識」(13, 79a13-14) の例として、「丸い傷の治りがより遅い」という医学的事象を幾何学が説明する例を挙げている。だが、科学の大域的な対象領域間の関係に訴えることなしに、この医学の例と先の光学の例を区別することは困難である。

最高類解釈と本質解釈という既存の二つの解釈路線は、いずれも知識の類という概念の分析として不満を残す。とはいえ、一方の短所は、他方の長所でもある。すなわち最高類解釈は、類に大域的領域という性格を正しく与えている。また本質解釈も、類概念と自体的帰属の理論との関連を踏まえ、類の統一性が単なる約定の問題でないと示す方針は正当である。

2. 知識の類と原始項

比較的注目されない箇所だが、知識の類と知識の統一性について最もまとまった議論を行っているのは 28 章である。本節では同章の読解を通じて、知識の類が、当の知識に属する諸論証の諸主項をメンバーとする集合であること、および類の統一性の根拠が、その類の各メンバーの定義上の基本構成要素に存することを論じる。まず、以下に全文を引用する。

[a] 一つの類の知識が、一つの知識である。[b] 一つの類とはすなわち、第一のものどもから構成されており、諸部分である、ないしはそれらの自体的諸属性である限りのものどもである。[c] 知識同士が異なるのは、それらの諸原理が同じものどもからあるわけではなく、また一方の諸原理が他方からあ

るわけでもない限りのことである。[d] このことの徴表があるのは、論証されえないことどもへと至る場合である。[e] というのも、それらは論証されてきたことどもと同じ類のうちにあらねばならないから。[f] そしてまたこのことの徴表があるのは、それらを通じて示されることどもが同じ類のうちにあり、同類的である場合である。(28, 87a38-b4¹³)

アリストテレスは [a] で類が知識の個別化の原理であることを明言する。類の内実は [b] で補足的に説明される。そして [c] では、知識の同一性に関して一定の基準が示され、[d]-[f] では知識の同一性の徴表 (σημείον) が語られる。

[b] の原文は “ὄσα ἐκ τῶν πρώτων σύγκειται καὶ μέρη ἐστὶν ἢ πάθη τούτων καθ’ αὐτά” である。この箇所代表的諸解釈には下表のようなヴァリエーションが見られる¹⁴。

	ὄσα ἐκ τῶν πρώτων σύγκειται	καὶ	μέρη	ἢ	πάθη τούτων καθ’ αὐτά
Ross	(原始項から構成されるものども)	すなわち	類の諸種)	または	類の諸部分の自体的属性
Mignucci	類の近接類と種差を定義にもつものども)	すなわち	(類の諸種	または	諸種の自体的属性)
Barnes	原始項から構成されるものども)	すなわち	原始項ないし派生項の本質の部分	すなわち	原始項ないし派生項の自体的属性
Detel	原始項から構成されるものども)	および	原始項ないし派生項の規定	すなわち	原始項ないし派生項の自体的属性
Bronstein	原始項から構成されるものども)	および	原始項ないし派生項の本質的属性	または	原始項ないし派生項の論証可能な属性

以下、これらの解釈との異同の確認を通じて、本論文の解釈とその根拠を示す。まず接続詞 καὶ と ἢ の役割についての本論文の理解は、Mignucci のそれに従う。理由は純粹に語学的である。第一に、καὶ は主語の共通する動詞句を結

13 以下、引用は Ross 1964 を底本とする。なお底本に従い、87b1 ἄρα という Mure の修正提案を採る。

14 各々、Ross 1957; Mignucci 1975; Barnes 1993; Detel 1993; Bronstein 2016, ch.11. 以下、本節で論者の名前を挙げる場合、これらの文献の対応箇所を指す。

んでいるため、Bronsteinのように別々のアイテムを結ぶと解するのは無理がある。第二に、BarnesやDetelのようにκαὶと並ぶἤを言い換えの意味に理解するのは困難である。第三に接続詞の結合順序について、Rossのようにκαὶが優先的に結合すると解する場合、πάθη以下はὄσα節の外側に位置するが、ὄσα節は属格ἐνὸς γένουςと同格的であるため、πάθηという主格形は破格となる。したがって、ἤ以下を含む全体が一個のὄσα節をなすと解するほうが好ましい。

次いで接続詞が結ぶ諸要素について検討する。ὄσα ἐκ τῶν πρώτων σύγκειταιはMignucci以外が一致するように、10章の議論を踏まえて理解するべきである。先述の通り10章では、(α)存在が措定される原始項(τὰ πρώτα)と、(β)意味表示のみが措定される派生項(τὰ ἐκ τούτων)とが区別される。「単位」「大きさ」は前者の例、「直」や「三角形」は後者の例である(10, 76a31-36)。「から(構成される)」という表現は、両者の間の定義的な先行関係を示唆する。

他方、それらがμέρηと呼ばれるのは、原始項から構成されるものどもが類に帰属するという意味である。RossやMignucciはこの方向で理解するが、μέρηを特に「種」と同定している。だが先述の通り、この箇所の規定は(7章や10章の規定と同様)、知識の「類」が種の相関概念であることを示唆しない。むしろ、かりに種を指していたならεἶδηという直接的表現を期待してよい箇所だとも考える。したがって、文字通りに部分全体関係として理解するのが安全である。ただし、分かりやすさのため、μέρηを集合のメンバーと呼ぶのは、比較的無害な再構成だと思われる。なお、文字通りには原始項自体は類に含まれないようにも読めるが、必ずしもそのように厳格に解する必要はないだろう。他方、『形而上学』Δ巻25章を援用してμέρηを定義の構成要素とするBarnesの解釈は唐突であり、説得力を欠く。なお、接続詞ἤの上掲解釈の帰結として、類のメンバーのうち、論証の主項となるような派生項とそれらの自体的属性はここでは一旦区別される。

したがって、本論文の[b]の解釈を改めて表に示すなら、以下のようになる。

ὄσα ἐκ τῶν πρώτων σύγκειται	καὶ	μέρη	ἤ	πάθη τούτων καθ' αὐτά
原始項から構成される ものども	すなわち	(類のメンバー=原 始項と派生項	または	類のメンバーの自体的 属性)

内容は以下のようにパラフレーズできる。「知識の一つの類は、存在が措定さ

れる原始項と、それを定義上の構成要素とする諸々の派生的主項、および、それらの主項について成り立つ諸々の述項をメンバーとする集合である」。

ここで「類」と呼ばれるもののうち、7章では特に諸主項の集合のみが「基礎に置かれる類」(75a42-75b1)と総称される。したがって28章の類概念はより広義だが、全体として想定される知識の構造は同じである。

Mignucci が注意するように、[b] までの叙述は類の統一性の基準を明示的に与えるものではなく、単なる類の内部構造の記述にすぎない。とはいえ、この記述から、原始項が類の個別化の原理であると解するのはごく自然である。この解釈を「原始項解釈」と呼ぶことにする。

続く [c] では知識の個別化の基準が次のように与えられている。「知識同士が異なるのは、それらの諸原理が同じものどもからあるわけではなく、また一方の諸原理が他方からあるわけでもない限りのことである」。「諸原理」という言葉づかい、アリストテレスが項ではなく命題を知識の同一性の基準としていることを示唆する。[d] 以降における論証への言及もこの理解を裏付ける。

すると、もっとも単純に理解すれば、「から」は論証における導出関係を意味し、一文は次のようにパラフレーズできるようにも思われる。「二つの知識 S_1, S_2 とその原理の集合 P_1, P_2 について、 S_1 と S_2 が同一なのは、別の知識 S の原理の集合 P が存在して、 P_1, P_2 に含まれる各命題が P から論証的に導出できるか、 P_1 に含まれる各命題が P_2 から論証的に導出できるか、 P_2 に含まれる各命題が P_1 から論証的に導出できるか、のいずれかであるとき、かつそのときに限る」。

確かに「一方の諸原理が他方からあるわけでもない」という部分は、これで明瞭に理解できる。つまりこの補足は、光学と幾何学のような下関係にある知識は或る意味で同一であるという趣旨である。だが、「諸原理が同じものどもからあるわけではない」という部分を、同様に理解するのは難しい。この理解によれば、この部分は一つの知識に下属する二つの知識(例えば幾何学に下属する測量術と光学)の同一性を念頭に置いた記述となる。しかし第一に、そのタイプの同一性について、アリストテレスの具体的論及は見られない。第二に、そうした同一性を認めてよいかは内容的にも明らかではない。第三に、原理は一つの学知の内部では論証不可能だから、下関係を伴わずに類が無条件に同一である場合をこの読みではカバーできない。最後に、Barnes が指摘するように、この理解のもとでは、類の内部構造に関する直前の主張との関係が不明瞭になる。

したがってむしろ、Barnes が提案するように、前半の「から」は、命題とそれに含まれる項の間の構成関係として捉えるべきである。このとき知識の同一性には、類のメンバーの同一性を基準とする無条件の同一性と、類のメンバーを項とする前提の間の導出関係に基づく（下属関係を伴う）相対的同一性がある。知識 S1 と S2 の相対的同一性は S1 や S2 の無条件の自己同一性に依存し、無条件の同一性は究極的には項の定義的構成要素である原始項の同一性に依存する。

最後に [d]-[f] では、知識の同一性の二つの徴表が語られる。一方では原理と論証の結論が、他方では論証の結論同士が同じ類に属する（すなわち同じ類に含まれる項から構成される）ことが、（無条件の）同一性のテストとなる。論証の結論を参照するこのテストは、以上に提示した原始項解釈と整合的である。

原始項を知識の個別化の原理とする解釈自体は必ずしも新奇なものではなく、少なくとも Scholz の 1930 年の論考に遡る¹⁵。加えて最高類解釈の多くは、一種の原始項解釈を取る。具体的には、原始項と知識の類を同一視し、原始項が「大きさ」のように、全ての派生項を外延的に包含するものであると想定する。

しかし、ここでの論点はむしろ、原始項解釈は最高類解釈にコミットする必要はなく、かつ実際のテキストは最高類解釈とは異なる知識の構造を示唆するということである。実際にはアリストテレスは、例えば幾何学の場合は「点」や「線」にも同等に原始項の資格を与えていた。これらと幾何学の派生項である「三角形」の間に種類関係はなく、高々定義上の先行後続関係があるにすぎない。原始項から派生項が（したがって類全体が）構成される仕方は、最高類解釈が想定する種類分割に限られず、様々でありうる¹⁶。

3. 原始項と知識の個別化

ここまで私は、28章の論述を根拠に、知識の同一性が究極的には類の各メンバーを構成する共通の原始項の集合に由来するという解釈を擁護した。他方、知識の類に関する解釈は、類の移行禁止を適切に説明する必要がある。Steinkrüger の本質解釈の一つの強みは、テキストが示唆する、類の移行禁止と

15 Scholz 1930, 275.

16 このように考えるからといって、例えば McKirahan 1992, ch.4 が提案するように、類が主項・属性・原理等々の異種的なものどもからなるネットワークであるという漠然とした規定に留める必要はない。類は少なくとも第一義的には諸主項の集合として明確に定義できる。

4-6章の自体的帰属の理論との関連を明確に説明できることにあった。

実のところ、原始項解釈は、本質解釈と同じ方針で類の移行禁止を説明できる。主項の本質に依存しない属性を主項に述定する命題が論証できないなら、当の主項の全ての本質的構成要素を含む類に含まれない属性を述定する命題はなおさら論証できない。また、かりに論証の結論が総じて究極的に論証の主項に依存することを認めない場合でも、少なくとも4-6章の自体的帰属の理論は、項連関の必然性をもつばら結論の主項か述項の本質に由来することを要求する。したがって、当の結論が知識の類に含まれない中項を通じて論証されることはありえない。

原始項解釈にとっての問題はむしろ、類の移行禁止の例外事例の説明にある。原始項解釈では、本質解釈とは違って、下属関係が類の移行禁止の真正の例外事例となるからだ。もっとも、テキスト自体がそうした解釈指針を要求することは、光学－幾何学関係と医学－幾何学関係の区別に示されるとおりである。

アリストテレスは、光学的事象などの下属的知識の対象について、次のように述べる。

それらは、本質の点で他のものでありつつ、諸形相を享受している限りのものである。というのも、数学的な事柄は諸形相をめぐるものであるから。というのも、何らかの基礎に置かれるものについてではないから。というのは、幾何学も何らかの基礎に置かれるものについてであるとしても、少なくとも基礎に置かれるものについてのものとして、そうであるわけではないから。(13, 79a6-10)

すなわち、光学的事象は数学的对象ではないが、一定の形相をもつために、それらの諸形相を扱う数学に下屬しうる。ここで「形相」という語は「基礎に置かれるもの」との対比で用いられている。光線は直線という形相をもついわば複合体であり、さらに特定の光線は場合によって様々な幾何学的形状を取りうる¹⁷。

17 Cf. 27, 87a33 (および高橋 2014 *ad loc.*). Distelzweig 2013, 95 は質料形相論の枠組みが『分析論後書』に見られないことを論拠にこうした理解を斥ける。だが、 $\psi\lambda\eta$ の語は見られないまでも、自然学と数学の関係という主題に照らして、『自然学』1巻の議論につながる特徴づけと理解するのは自然である。また「形相 $\epsilon\acute{\iota}\delta\omicron\varsigma$ 」という語のこうした用法自体が『分析論後書』において稀であることも付言すべきだろう。

光学的事象と幾何学的事象のこうした形而上学的関係を踏まえれば、原始項解釈のもとで、それらを対象とする知識の下属関係は以下のように説明できる。例えば光線の定義には「直線的」などの幾何学的性質が含まれており、その限りで光学は若干の原始項を幾何学と共有する。とはいえ光学は幾何学的性質一般に関心をもつわけではないため、幾何学的には派生項であるものも原始項として受け入れるという仕方では、光学的事象に現れる幾何学的性質を、幾何学的証明には不十分な精度で把握することがありうる。その場合、光学は（アリストテレス自身の言い方では）光学的事象が「そうあること」は把握しても、「何ゆえそうか」を把握しない（78b34ff.）。

だが、以上の説明は、次のような疑念を呼び起こしうる。すなわち、光学的事象の原因説明に幾何学が必要とされる理由が、光学が一定の原始項を措定しないことにのみ存するのなら、単に光学に原始項を追加することで、こうした下関係は不要になるのではないか。さらにこの論点は、より一般的かつより深刻な異論を導きうる。すなわち、原始項の措定がもつばら人々の知的関心を反映するのなら、それは純粋な約定にすぎないのではないか。そうだとすると、原始項はいくらでも幅広く取れるため、原始項から構成される類は知識領域の画定という役割を果たせないのではないか。

原始項解釈は、第一の点を認めても特に問題がない。アリストテレスが光学と幾何学の区別によって説明しているのは、むしろ、一方の側が他方を知らなくてもよいという無知の可能性だと理解できるからである。光学的原始項と幾何学的原始項を合わせて、光学的事象の原因の説明が内部で完結する知識を構成することは、理論上は可能かもしれない。だが、光学者が幾何学について部分的に無知であるか、また反対に幾何学者が光学について部分的に無知であっても（cf. 13, 79a4）、幾何学と光学はそれぞれ自律的科学として問題なく機能する。

第二の異論について言えば、確かにアリストテレスは原始項の集合の取り方に制約を設けてはいない。とはいえ、原始項の取り方が純粋な約定にすぎないという考えはもっともらしくない。実際、光学－幾何学関係と医学－幾何学関係の違いは、光学的対象が大域的に幾何学的性質をもつものに対して、医学的对象はそうではないという点に存する。「丸い傷の治りがより遅い」という事実を幾何学が説明するのは、医学の探究対象に含まれる皮膚の創傷がたまたま平面図形の性質をもつからにすぎない。この意味で、医学の諸項と幾何学の諸項は、光学の諸項と幾何学の諸項より関連性が低い。私たちの理論的関心はこの事実に通

かれて分化し、それを反映して知識の原始項は選択される。たとい医学的事象と幾何学的事象の両方に通暁した博学者であっても、各々の説明には異なる原始項の集合に基づく別々の体系を用いるだろう。実際、こうした知識の多様性は、知識に関する理論の帰結である以前に、知の実践に関する単なる事実である。ゆえに類の移行禁止の原則も、知識の多元性を根拠づける原則であるというよりは、知識の多元性を所与として、そのなかでの誤謬推論を斥ける原則だと理解すべきである。

4. 結論

アリストテレスは知識の統一性の根拠をその類の統一性に求めた。統一的なものとして措定される類について、従来の有力解釈には、知識の諸対象と類種系列をなす最高類とするもの（最高類解釈）と、論証の一つの主項と同一視するもの（本質解釈）とがあった。最高類解釈の難点は、それが想定する類の存在措定の手続きがアリストテレスの論述と乖離する点、および最高類の設定が恣意的になる点にあった。他方、本質解釈の難点は、アリストテレスが示唆する類の異種性や知識の対象の大域的性格を適切に反映できない点にあった。これに対し、本論文では、知識の統一性を主題とする1巻28章の読解を通じて、統一性が類の各メンバーを構成する原始項の集合に由来するという解釈（原始項解釈）を擁護した。原始項解釈は、類の措定手続きに関するアリストテレスの論述と整合的であり、類の大域的性格やメンバーの異種性を適切に捉えるうえ、科学の対象領域の区分を、柔軟だが恣意的ではない仕方で説明できる。以上が本論文の主張である。

最後に、本論文が擁護した原始項解釈が、『形而上学』などに見られる焦点的な知識観の理解にもたらす示唆に触れておく。『形而上学』Γ巻2章で構想される存在論は、「あるもの」を類として措定するという問題含みの操作を含んでおり、とりわけ「「あるもの」は類ではない」というテーゼとの整合性が問題とされてきた。これについて私は以前に、種の相関概念としての「類」と知識の「類」を区別すべきであると論じた。本論文の結論はこの議論を裏付けるものである¹⁸。

18 杉本 2024。ただし同論文は、「基礎に置かれる類」の概念と論証の主項という位置づけの関連を強調する一方で、類が端的に個々の論証の主項と同一視されるべきか否か（つまり本質解釈

より重要な論点として、Γ巻2章における知識の焦点的構造の主張は、原始項解釈と親和的である。アリストテレスは「ある」などの述定のもつ焦点的構造を、第一義的には相互に関連する多義的述定が成り立つことの説明として導入するが、それは知識の構築という文脈においては、同時に知識の対象となる原始項から諸派生項を構成する役割を果たす¹⁹。つまり、ウーシアという焦点への依存関係からあるものの統一性を説明する企ては、原始項解釈に基づくなら、ウーシアという単一の原始項が全ての派生項の構成要素をなす類を構成する企てとして理解できる。この意味で、存在論の類としての「あるもの」の措定は、正しく『分析論後書』で理論化されたタイプの類の措定とみなしうる。

参考文献

- Barnes, Jonathan. 1993. *Aristotle Posterior Analytics*. 2nd ed. Oxford University Press.
- Bonitz, Hermann. 1870 [1961]. *Index Aristotelicus*. De Gruyter.
- Bronstein, David. 2016. *Aristotle on Knowledge and Learning*. Oxford University Press.
- Detel, Wolfgang. 1993. *Analytica Posteriora*, 2. Halbband. De Gruyter.
- Distelzweig, Peter M. 2013. “The Intersection of the Mathematical and Natural Sciences,” *Apeiron* 46(2), 85-105.
- Frede, Dorothea. 1974. “Comment on Hintikka’s Paper ‘On the Ingredients of an Aristotelian Science’” *Synthese* 28(1), 79-89.
- Hintikka, Jaakko. 1972. “On the Ingredients of an Aristotelian Science,” *Noûs*, Vol. 6, No. 1, pp. 55-69.
- McKirahan, Richard. 1992. *Principles and Proofs*. Princeton University Press.
- Mignucci, Mario. 1975. *Largomentazione dimostrativa in Aristotele*. Antenore.
- Owen, G. E. L. 1960. “Logic and Metaphysics in Some Earlier Works of Aristotle” in I. Düring and G. E. L. Owen (eds.), *Aristotle and Plato in the Mid-Fourth Century*, Göteborg, pp.163-190.
- Ross, W. D. 1924. *Aristotle Metaphysics*, Vol. 1, Oxford University Press.
- Ross, W. D. 1969. *Aristotle’s Prior and Posterior Analytics*, Oxford University Press.
- Ross, W. D. 1964. *Aristotelis Analytica priora et posteriora*, praefacione et appendice avxit L. Minio-Paluello, Oxford University Press.
- 酒井健太朗. 2020. 『アリストテレスの知識論』九州大学出版会.
- Scholz, Heinrich. 1930. “Die Axiomatik der Alten”, *Blätter für die deutsche Philosophie* 4, 259-79; translated as “The Ancient Axiomatic Theory” in J. Barnes, M. Schofield, R.

の是非)を明確にしていなかった。

19 Cf. Wilson 2000, ch.4.

- Sorabji (eds.), 1975, *Articles on Aristotle* 1, Duckworth, pp.50-64.
- Steinkrüger, Philipp. 2018. "Aristotle on Kind-Crossing," *Oxford Studies in Ancient Philosophy* 54, 107-158.
- 杉本英太. 2024. 「アリストテレス存在論の知識論的構成」『哲学雑誌』138(811), 224-245.
- 高橋久一郎. 2014. 「分析論後書」内山勝利・神崎繁・中畑正志(編)『アリストテレス全集 2 分析論前書・分析論後書』岩波書店.
- Wilson, Malcolm. 2000. *Aristotle's Theory of the Unity of Science*. University of Toronto Press.
- Zuppolini, Breno. 2018. "Aristotle on Per Se Accidents" *Ancient Philosophy* 38(1), 113-135.